

綴方学習個体史の考察

—— 鶴沢 覚氏のばあい ——

野 地 潤 家

一

鶴沢覚氏（千葉師範卒業）は、「私の生活と私の受けた綴方教育」と題する綴方学習個体史を、雑誌「綴方教育」（昭和2年12月号、昭和3年1月号、文禄社刊）に掲載された。鶴沢覚氏は、明治四五年（一九一三）四月、千葉県山武郡福岡村の小学校に入学し、尋常科・高等科に学び、千葉県教育会教員講習所（二カ年）を経て、千葉師範学校に進まれた方である。

鶴沢覚氏は、自分の受けてきた、尋常科・高等科・講習所・千葉師範学校における綴方教授（綴方学習）を学年ごとに分けて、みずから記述された。総じて簡略な述べ方ではあるが、これらの綴方学習個体史は、大正期の初等・中等教育における綴方学習の実態を示すものとして、注目すべき試みとなっている。当時の綴方指導方式は、△教師出題↓生徒創作↓教師評点▽と画一化されていたことが指摘されている。

鶴沢覚氏の綴方作例そのものは、詩・俳句の類を除いて、あまり掲げられていないが、実際に教師から提示された課題（文題）については克明に記載されている。綴方帳を所持させ、文範が用いられていたことも述べられており、それらを通して大正初期の綴方教授の実態をうかがうことができる。

二

鶴沢覚氏は、小学校低学年時代の綴方学習をふりかえって、次のように記述しておられる。

1 尋一の綴方教育

弱虫だが、学科は苦しくなかった。入学以前にこんな読本はとつくに済んで課外読物をしてゐたので、私は国語の時間が一番好きであつた。

綴方は二学期から始められた。先生が題を出してくれて、生徒はそれについて短い文章をつくるのだ。

童謡の教育は無縁なかつた。余り綴方の事は記憶にないが、トモダチと云ふ題で何か書けと出された事があつた。何を書いていゝか解らない。だつて、先生は綴方と云ふのは、どういふ仕事か、どんな所を書くべきかを教へてくれない。私はトモダチと云ふ言葉が入つて居る文章ならそれでいゝと考へた。

ワタクシハ、キノフ、トモダチトヤマヘアソビニユキマシタ。
と、先づ書いた。又、修身の時に教つたので

トモダチハ、ナカヨクセネバナリマセン。

と書いて甲上を貰つた事を覚えて居る。私はこんなのが綴方だなどと考へる様になつた。

一面に燦然たる金に、五月の陽の下を帯の様に流れてゐた。

後年、千葉に居る事満五年。大網を発車するとその美しかった事を思ひ出して注意するが、迎ふる春は春だが、往年の如く、感動に充ちた美しさは見出されない。「私の生活と私の受けた綴方教育」、「綴方教育」第二巻第二二号、昭和二年一月号、六〇八頁）

鶴沢覚氏は、みずからの幼児期をふりかえつて、印象深く刻まれていることをエピソードとして述べつつ、次のように回想しておられる。

「溫和しかつたのと、長男に生れたのと、祖母が馬鹿可愛がりに可愛がつてくれたので、私の要求する事は大抵充された。私は臍白小僧で弱虫で育つて行つた。」(同上誌、四頁)

「父はその頃、村の小学校へ勤めてゐた。学生帽の様な帽子をかむつて弁当箱を下げて長屋門から消える父の姿を、私は縁側で云ひ知れぬ心で見送つて居た。私は父の洋服姿が気に入つて、ああなりたいとは思つて居なかつたでもあらう。だが、父のかむる帽子だけは頗る気に入つた。

帽子の裏の紫甲斐絹に獅子に牡丹の模様が書いてあつたのが、何となく私の子供心を捉へて了つた。

銀色の八咫鏡の形に教と云ふ字を書いた徽章も、形よく美しく、上品に出来て居るので慇しうて堪らない。

余り私が慇しがるので、父は小さな学生帽を買つて来てくれた。然し、父のに比べるはずつと粗雑に出来てる事の解る帽子がどうして私の気に入らう。

父も困つて了つて、学校へ行く時迄、朝の中帽子を借す約束した。

私はだぶ／＼な父の帽子をかむつてゐる乍らも、自分の好きな獅子に牡丹の裏が頭にのつかつては居るし、八咫鏡形の徽章も自分にくつゝいてゐるので嬉しくてたまらなかつた。

然し、八時になると悲しく寂しい。

学校へ行く父が取り戻しに来るからだ。

臍白な僕はとう／＼一つのトリックを考へつた。

それは父が登校する頃になると、祖母の背中の上で、父の帽子をかむつた儘、狸寝入をきめる事だ。

「坊。学校へ行くだから、帽子をかせよ。」父は靴をはき乍ら、優しい声で云ふ。

こゝぞと、私は本氣になつていびきをかき始める。

祖母が笑つても、母が笑つても、私は泣かん許りに本氣だ。流石の父も、とう／＼敗けて、外行の中折帽子で行くことになる。

此の事は何日も続いた。そうして帽子の切れる迄私がかむつてしまつた。」(同上誌、五頁)

「弱虫で身体の弱い私は外へ出て、あばれる事が嫌であつた。母はそれを随分心配したが、祖母が私の味方なので、母も黙つて了ふ。

新聞で片仮名、平仮名を教つて字を覚えた私は、五つ六つの時に幼年画報を自由に読むことが出来た。

父も毎月欠かさず買つてくれた。

読本も買つて貰つたので、小学校へ入学する時は尋常一年の読本の課程は全部終へて居た。」(同上誌、五〇六頁)

「朝飯の出来る迄、眼がさめてから、お菓子をねだつて、それが済むと祖母に話をきくのが此の頃の日課の一だつた。

カチ／＼山、桃太郎、花咲翁、猿蟹合戦より外に祖母は知らなかつた。

中でも桃太郎と猿蟹合戦が好きだつた。

話し振りのうまい祖母は、頼むとすぐ話して聞かせた。

毎朝同じものを頼んだ。きいた。そしてあきなかつた。

私は其の頃より桃太郎の英雄主義を愛し、猿蟹合戦の正義を愛して居たのだ。さては善き心によつて撒かれた灰は花となる事を信じて居た少年であつた。(同上誌、六ペ)

鵜沢寛氏は尋常科一年生への綴方教授は二学期から始められたと述べられている。大正期には、一年生の第二学期に入つて児童に綴方の指導を開始するという例は多かつた。

明治末年(四五年)から大正期にかけて、童謡(↓児童自由詩)の指導は、まだ行われていなかった。

鵜沢寛氏の小学校低学年の時期は教師の示す文題(課題)で文章を綴ることがほとんどで、みずからの生活に文題と材料とを求めて、それを文章にしていく、随意選題の方式はまだとり上げられていなかった。

前掲の記述によれば、鵜沢寛氏のばあい、一年・二年の低学年の時期に、すでに綴方への意識が芽ばえ、綴方帳による学習を積極的を受けとめていたことがうかがわれる。

三

つづいて、中学年における綴方学習に関しては、次のように記述されている。

3 尋三の綴方教育

教師出題は此の時も依然変りがない。是が私の生活の中に或る懐しき、或る美しきものを見出して自分ひとりその気持に浸つてゐる生活は此の時も続いた。然し、私の綴方帳にはそうしたものが書かれてなかつた。私は、こんな事を主題にして、綴方と云ふものは書くべきものでないと云ふ様にも考へてゐた。然し、幼年世界の懸賞の作文と我々の書く作文の如何に相違してゐるかもはつきり感じてゐた。

或時は私は泉道に友達と編目の美しい小石を拾つて居た。

或時は母の贖を盗んで井戸から麦稈で冷い水を吸ひ上げてゐた。

秋になれば母達の稲を刈る田の傍に私達は遊んでゐた。小田の上に鳴くきいきい百舌鳥ひよどりの声に私は秋を感じた。そして私達の紺紺の単衣の懐は梨と柘榴と柿と無花果でふくれてゐた。

汽車の響は子供心をそゝつた。或るあくがれを切なくさへした。

あの汽車の行方には千葉があり、喜一兄さんが居る。夕暮の麦畑に佇んでゐると、ゴーツ！と汽車の遠鳴り。私の胸は云ひ知れぬ波を打ち、麦の穂はざわ／＼とさんざめく。

忠臣蔵の村芝居に唸つたのも此の頃だ。

昆虫生活も此の頃だ。私は小さな虫を可愛がつた。蟬、甲虫、玉虫、蟋蟀、蝨、蠍、ばつた——皆、私の朋友であつた。私は冷麦の空箱を持ち出して、その一方へ蚊帳を張り、その中へ朋友を一杯招き、私は天晴、動物園主であつた。

蟋蟀の家も作つてやつた。門の前の広い砂場に田から土を運んで、枯草を敷いた蟋蟀の寝床の上に、お城の様な家を作つて、その中へ蟋蟀を入れ、耳を澄まして鳴く声を待つてゐた。

又、祭の後のわびしき。二三日を共に楽しく遊んだ従兄たちも帰らねばならぬ日が近づいた。

また来るよー いくらかうなだめられても去り行く人々との別離の悲しみに納戸で噎り泣いてゐる涙脆い私でもあつた。

4 尋四の綴方教育

分教場を終へて本校の生徒になつた。新しい友はふえた。恐い友もあらはれた。

此の時の創作教育も教師出題で教師は点をつけて勝手にかへした。級長であつた私は皆に綴方帳を配る役目を仰せつけられた。私は、皆はどんな事を書くかしらと、こつそり開けて見た時であつたが、やつぱり私と大同小異であつた。

この年の出題は

四年生になりました／豆の花／私の家の庭／山内一豊の妻／梨を送る手紙／西瓜を送る手紙／暑中見舞／欠席届／秋季皇霊祭

／兄弟は両手の如し／私の学校／冬の夕景

等であつた。(引用者注、前掲／線は引用者において施した。)中、豆の花、山内一豊の妻は読本の課を応用したものらしい。私達はこんな題は大嫌ひであつた。然し、題が悪いと云ふのではない。課を応用したもの、有富氏の説の様に鑑賞より出発した創作にするならそれも美しい一の天地だ。指導の皆無が私達を途方に暮れさせたのだ。私達は時間中には黙つていたづら書きをしてゐて、家へ帰つてから読本を殆ど写し上げた。それより外に仕方なく、先生もそれに甲や甲上をつけた。字の汚いのが乙か丙であつた。

殊にふるつて居るのは秋季皇霊祭と云ふのが出された時だ。未だ

秋季皇霊祭と云ふのは何をする日か知らなかつた。彼岸の中日だと教つたが、彼岸の中日とは更に解らない。此の時は何も書けない人が沢山あつた。

私は困つた揚句、字の意味から此の日を考へた。

秋季と云ふのは秋の事だが皇霊と云ふ意味が解らない。祭だから此の日は何かの祭をする日に違ひないと思つた。

皇霊に骨が折れた。皇は天皇の皇であると言ふ事だけは解つたが霊と云ふ意味が解らない。小学生を読んだ時に此の字にミタマと仮名がつけてあつたが、ミタマの解らぬのも霊と同様だ。

何も書けないで困つて居ると、先生は此の時間に必ず上げると云ふ。後に居る三橋と云ふ友達に字の意味を話したら、そりや、きつと天皇陛下が祭をやる日だと云ふ。

可怪しいと思つたが、何も書くことがないのに是非上げると云ふので、秋季皇霊祭と云ふのは、秋、天皇陛下がお祭をする日ですと書いた。先生も是には開いた口がふさがらなかつたと見え、評点をつけなくて返してよこした。今でも四年生の綴方帳のこの所を開けると眼から火の出る思ひがする。

私達が考へて居て書きたいなと思つて居る事は、ちつとも題に出なかつた。綴方は実際、小手先で綺麗に作り上げねばならなかつた。

此の年からは本校だつたので、文範と云ふのを教はつた。先生が文範を黒板に書くと、私達は墨でそれを清書して行くのだ。今年年に写させられたものには

天照大神 海岸の夕景

の二つであつた。何でも今から考へれば最新綴方集成と云ふ本にあ

る文であつたらしい。私は幼年世界を読んで居た。綴方には全く興味を失つてしまつた。(同上誌、八〇一〇頁)

ここで鶴沢寛氏は、自分の受けた教師主導型の課題本位の綴方教授について、「指導の皆無が私達を途方に暮れさせたのだ。」と述べ、また、「私達が考へて居た書きたいなと思つて居る事は、ちつとも題に出なかつた。綴方は実際、小手先で綺麗に作り上げねばならなかつた。」と述べておられる。当時の課題主義の綴方教授が持つていた欠陥や弱点や限界がおのずと示されている。

前掲の記述の中に「有富氏の説の様に」とあるのは、有富郁雄氏のことを指しているかと思われる。有富郁雄氏には、「創作的發展へ」の道程たる「国語読本の鑑賞」(大正13年4月26日、東京出版社刊)、「綴方指導」「綴方指導」(大正14年4月17日、東京出版社刊)などの著述がある。

有富郁雄氏は、国語読本における教材の鑑賞を重視し、さらに綴方指導における鑑賞の重要性を強調した方である。有富郁雄氏は、「若しも他人殊に名作を読んで、直ちにそれに似た文を書くなら模倣でありませうが、私の言ふのは、書く為めに読むのでなくて、たゞ味ふ文でよいのです。いやたゞ味ふだけでなければならぬのです。さうすると、いつかはそれが、あらはれて、独特の表現をも為し得るやうになるのであります。此の点からして、私は綴方指導中鑑賞は最大の要素であるかと思ひます。だから私の綴方指導は、鑑賞主義の綴方指導と銘打つても、一向差しかへはないのであります。」(前掲「綴方指導」五〇〇〜五一頁)と述べられてゐる。

また四年生からは、分校でなく本校に通うようになり、そこでは

文範(模範文)による指導を受けるようになったことが述べられてゐる。前掲文章中、「何でも今から考へれば最新綴方集成と云ふ本にある文であつたらしい。」とある、「最新綴方集成」というのは、「全編綴方教授資料集成」(国語教授研究会編、大正2年10月5日、全編綴方教授資料集成)のことであろう。この「綴方教授資料集成」は大正六年(一九一七)三月三〇日には、一三版が刊行されるほど広く利用されたようである。

鶴沢寛氏が四年生の折、範文として写したという、「天照大神」・「海岸の夕景」は、次のような文章であつた。

天照大神(冒頭段落のみ引用)

天照大神は天皇陛下の御先祖におはします。この神さまは女におはしまして、初めて高天原に天下りましてこの日本の国を治め下さつたえらい神様でございます。大神はものごとくに明るい御方で、稲をうゑることや、蚕をかつて糸を取ることもお教へて下さいました。我が国がこんな稲をうゑたり、蚕をかつたりすることが盛になつたのもこの神さまのおかげでございます。(同上書、二一四頁)

この文章の上欄には、「読本巻八第一「皇大神宮」の課に聯絡／指導法に適す」と注記がある。

海岸の夕景

秋の空が澄み渡る頃になつて、海が濃き青色に見えはじめた。私は今海岸に立つて日の暮れゆく景色をながめてゐる。

太陽が山の端にちかづくくと、西の空は次第に、かはつて、その光が海の波にうつつて来る。はじめはうす黄色であつたがだん／＼橙色になり、次に紅になつて日は西の山にはいつてしまつた。すると

善いやら、悪いやら……。

多分二学期の考査には書籍を註文する文が出たと思つた。知的能力の発達する時期であつた所為か國語や作文は大嫌ひになつた。五年で好きであつたのは算術と地理であつた。

6 尋六の綴方教育

此の年は男子師範を卒業した許りのパリパリな先生に教つた。

此の先生は随分理科が好きであつた。大正六年の片田舎で先生は私共に児童実験をやらせた。

私等は跣足足袋で東金まで上つて来て岸本薬局からアルコロール一合買つて歸つた。

裁縫室の大きな戸棚は私共の実験機械入れとなつた。実験は私共の大きな好奇心を誘つた。私共は理科に唸つた。

此の年の学芸会には私は磁石の話と実験をやつた。殊に他の級では朗読や書方があるのに私共の級では

阿新丸のお話 一つで後は悉く

電流の話 起電機の実験 磁石について

等と悉く理科であつたのでも、私達が何れの方向に指導され、統一されてゐたかど解らう。

実験には長い時間を要する。その分には理科の時間だけでは足りない。綴方の時間がそれに廻された。

一学期には時間と云ふ題でたつた一つ。

二学期は綴方の時間は殆ど理科であつた。

三学期になつてからは、もう卒業だと云ふので、社会へ出てからの準備をしなくてはいけないと云ふので

受取証の書き方／欠席届／出席届／死亡届／金子借用証書／手紙の構造／手紙の冒頭の文字語句／結末の語句／脇付の語句／葉書の書き方

等を教はつた。

然し、此の年は自分乍ら氣持よく勉強の出来た年であつた。先生が若くて、自分達を可愛がつてくれたからかも知れない。

小さき科学者はアルコロールランプに火を点じ、納戸の暗闇で試験管の中の食塩を煮立てた。

小さき科学者はランニングの小さきチャンでもあり、小さな俳諧師ともなつた。

俳句を作る様になつた動機は先生が大高源吾の話をして下さつた時に

何のその岩をも通す桑の弓 子葉

の句の話をされてから、たつた一七字で素晴らしい事を書くものだと思つて、俺もやつて見ようと、矢鱈に十七字を書きつけたものだ。

それを上等の半紙に丁寧に一句一句清書して赤紺糸でとちて、上に緑葉集と題をつけた。

緑葉と云ふのは、緑は青葉で生々と若々しく元氣である所から何時もこんな心でありたいと云ふ考へからつけたのだ。

緑葉集の中にはこんながある。

窓越しに藁屋根見とて秋の暮

田圃にて案山子を笑ふすゞめ哉

大狸腹打つ音に月のぼる

(前掲誌、一〇〇〜一一一)

五年生の折、提示された文題のうち、「書籍を註文する手紙」・「朝顔」・「菅原道真」などは、四年生の場合と同様、「全編綴方教授資料集成」に、文例が収録されていた。

文範（模範文）として示されたという「菅公」は、「菅原道真」
として、この「資料集成」に次のような文章が掲げられていた。

菅原道真

菅原道真は宇多醍醐二代の天皇に仕へた忠臣であつた。当時は藤原氏の勢が大さう盛であつたのに天皇は道真の才学のあるのを御信用なさつて、右大臣にあげられた。時に左大臣に藤原時平といふのがあつて、道真をねたんでゐたので、天皇に讒言をした。道真はこれがため、右大臣といふ高い官からおとされて筑前の太宰府に遷された。道真は都を旅立たんとする時、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花、

主なしとて春な忘れぞ。

といふ歌を詠んで、庭の梅に別れをおしました。

道真は罪もないのに官を下げられ、その上遠国へうつされたけれども、少しも世をいきどおり、人をうらむ心はなかつた。筑紫に下る道に、昔から知つてゐた、駅長があつたが、道真は「駅長驚くなかれ、時の変わりうつること。花咲く春あれば、葉落つる秋あり。」といふ意味の詩を作つてあたへた。筑紫に行つた後は、常に門を閉ぢて出ることはまれであつたが、片時も君を忘れ奉ることはなく、雨の降る朝も風の吹く夕も、見るもの聞くものにつけて、都の空がしたはしいので僅かに詩歌に思ひをよせて、ひとり自らなぐさめてゐた。いつのまにか秋の半ばも過ぎ去つて、九月十日の夜となつた。

月が皎々と照つてをるのを見ると、今昔の感にたへず、思賜の御衣をさぐつて、はるかに東の方を拜んで、一篇の詩を作つた。

去年の今夜清涼に待す。秋思の詩篇ひとりはらわたをたつ。思賜の御衣なほこゝにあり。さぐり持ちて毎日余香を拜す。

（前出「全編綴方教授資料集成」、三〇七〜三〇八頁）

当時、文範（模範文）として示されたものは、質量ともに、かなり水準が高かつたように思われる。

前掲の記述によれば、五年生になつて、綴方の考查が行われている。大正期には、各学期に綴方の考查の時間が設けられていた。鶴沢氏の小学校においても、特定時間の考查のための綴方作品が評価の対象にされたようである。

六年生では、理科の学習に重点が置かれ、綴方学習はかなり軽く扱われた。第三学期、卒業を前にして、届や手紙の書き方の指導に力が注がれたというのも、明治期からの実用主義の綴方教授観が残存して、それがあわてて応急的に顔を出したという印象を受ける。

六年生になつて、鶴沢覚少年は、先生からの大高源吾の俳句の話がきっかけになつて、俳句を作り始め、「緑葉集」という句集をみずから編むようになる。

五

ついで、鶴沢覚氏は、高等科時代の綴方学習について、次のように述べておられる。

7 高一の綴方教育

東京高等工業行きも母、祖母の反対の為に、中学へ行くことをよ

して師範へ行く事にきまり、私は高等一年に進んだ。

綴方教育は

教師出題↓児童創作↓教師評点

は悉く今迄と同じ。此の年の出題は

友人の中学校に入りしを祝ふ／恩師のもとに／手伝ひをたのむ

手紙／過ぎ去つてしまつた夏休み／秋の吾が村

等、尚其の外に先生が教へて下さつたものに

日用文語の解（手紙文の候、候廻等の用法）／年頭の感／樂中

見舞の文／貸金催促の文／誕生日に友人を招く文／註文状／師

の恩／朋友

等がある。雑誌は一年から此の年迄一冊かゝらず読んで居た。幼年

画報―幼年世界―少年世界と進んで居た。日本少年も読んだ。涙つ

ぱいものや、死のあるのは殊にきらつた。肺病の事を書いた頁は二

度と開かなかつた。

葛原函の少年小説、木村小舟の感想、阿武天風、変装旅人の押川

春浪、地底の宝玉の三津木春影、五稜廓の江見水蔭と冒険小説がす

きだつた。血あり、涙あり、障礙を突破し行く勇者を讃美する英雄

主義者であつた。

今迄に書き落した新聞は読むなど云はれてゐたが読んでゐた。

家で東京日々をとつてゐたので三年頃から読んだ。たゞ字さへ覚え

ればよかつたのだ。

菊池幽芳―小雪・小夜子・女の生命 中村吉蔵―毒草

講談も読んだ。

義士銘々伝・南總里見八犬伝・鬼小島弥太郎・塚原下伝・宮本

武蔵・田宮坊太郎・岩見重太郎・梁川庄八・車丹波守等々。

私の近眼時代が始まつた。又此の頃、父の本箱から鴨長明の方丈

記や近松門左の国姓爺合戦等をわからぬ乍ら読んだ。

父が師範学校で使つた読本にある源平盛衰記よりの抜抄も悉く読

んで居た。

本当の意味に於ける私の創作は此の時代は俳句となつて続いた。

緑葉集第三巻には

夕闇や招には黒き木々のかけ

初雪や鶏の足跡松葉かな

雪白く雨天赤し朝の雪

8 高二の綴方教育

綴方の時間

教師出題―児童創作―教師評点

出題

友人の中学校に入りしを祝ふ手紙／初夏／病氣見舞の文／種苗

買入を頼む文／仏事に人を招く文／同返事／近況を友人に報ず

る手紙／流行性感冒予防法を問はれしに答ふる手紙／冬の景色

／卒業にのぞみ／家庭のたのしみ／卒業せしを東京の叔母に報

ずる文

自然の觀察、人事の洞察、描写の方法について一年からの先生

も教へて呉れなかつた。私等は文範を時々授かり、漠然たる方向を

勝手に認識した。

綴方といふものは、文範の様に書くべきものと考へてゐた。生

々とした自然を生々とした瞳で見つ居たに因らず、それが最も芸術表現の根本であるにかかはらず、私達の綴方には不必要のものであつた。

口語でも書き、文語でも書いた。殊に此の年は大和田建樹に心酔して居た時代であつた。雪月花は私の作文の先生であつた。

火高き木立はわれを迎へて立ち、なつかしき小川は足下にパスに歌ふ。げに最愛の母と語るに似たるは夏を迎ふるの感なり

— 夏の一節 —

俳句も続いて十七字並べて居た。こつそりと和歌も書いた。俳句では芭蕉の句を方々の本から集めたり何かした。私は趣味の生活を極愛した。

光陰は矢の如しといふが君と別れてから、もう一年余りも歲月はすぎました。実に歳月の早いには驚かされますね。其の後貴君も御壮健で成東に通学致し居られますとの事何よりです。

今日は日本晴の天気であつたので、久しぶりで遠く散歩しました。農夫が宝とあがめた稲も最早刈り取られ、其の近所に積まれた粟稲村は豊年を思はせます。黄金の波であつた表面は黒の土と變つてしまひました。水のある田にはつた水。氷の上を踏むや、石を投ずる少年等のあるを見付け、僕も行つて見ました。なか／＼興味ある事ですね。

畑の大根は掘り取られて満目荒涼の景です。皆黄色と變つたが「大根引きて松は独りになりけり」の句の如く常磐木のみは青々として居ます。

それから東京では流行性感冒がはやつて居るとの事、僕もマス

クを作つて着けて歩きます。知らぬ人は理髮屋の行列だと云つて笑ふでせう。

次は僕等には容喙するを得ない事ですが紛糾を加へて来た学校問題も一段落を告げ、蚕業講習会は数日前より始まり今日終るとの事です。

夏の頃、流行兎だつた鉄棒は城取りに権利を奪はれて、茫然として木枯に吹きさらされて居ます、此の頃は課外も始められ僕もその一人に加へて貰ひました。千葉へ行きます。

「梅一輪々々程の暖かさ」で日一口と暖かになつて来ます。おひまだつたら遊びにお出で下さい。

余り面白くもない手紙ですが、親友の君の事故かやうな文体で筆のまに／＼綴りました。乱文失敬。願はくは君よ。御自愛あれ。——友人に近況を報ずる文——

此の文の所々にある如くに俳句に首をつゝ込んで居たのが時にちらりほらりする。

然し、此のまるでナツチない観察や、つけ上つた様な浮調子な、ペタンチックな表現はとても堪らない。今見て、是が十五の時の文と云ふと、一寸恥しい気がする。

字だけが並べられて文になつてない気がする。

然り！私達の受けた綴方教育は字を並べる方法を教へられるのにあつた。

美しく、小綺麗に、難解語句を並べれば、ほめられてゐたのだ。技巧的教育だ。小手先の教育だ。

機械的教育だ。末梢だけの教育だ。

私の素直なありのまゝの観察、感情は、文にあらはれてゐるものと違つて居たかも知れない。

然し、誤られたる綴方なる観念は、私をして、つけ上つた眼を持つ様に我と我を励ましたのだ。(同上誌、一二〜一四頁)

鶴沢寛少年は、千葉師範学校へ進むことにして、高等小學校の方に入った。すぐれた意欲的な読み手であつた。子ども向けの雑誌を継続愛読し、講談本にも親しんだ。大人の読む古文(物語・隨筆の類)にも目を通した。

高等科二年になると、大和田建樹に心酔し、大和田建樹著「散文雪月花」(明治30年9月27日、博文館刊、大正15年8月15日、五二版刊)は、「私の先生であつた。」と言ひうるまでに、これを愛読し、多くの感化を受けた。

「散文雪月花」は、著者大和田建樹の「事にふれ折にふれて書きすさびたるまま」を集めてまとめられた詩散文集である。書名に關しては、「名をば雪月花とつけつ。月花を詠じ雪霜を記するものゝ多きによるのみ。」(自序)と述べられている。この文集は、散文・韻文、計一八一章から成り、洋装袖珍本六一五ページにもほる部厚いものであつた。

たとえば、この詩文集「散文雪月花」には、次のような文章が収められていた。

我庭の夏

いっしかわが庭の夏も来りぬ。つゝじこでまり盛やうくすきて。桜の実は乳児の指ほどにこぼれそめたり。物置の長椅子とりいだし、て若葉の下風に吹かるれば。子どもは袂をたすきにかけて。金魚池

ほとと庭の片すみにあつまる。(同上「散文雪月花」、一六〇〜一六一頁)

當時として、みずみずしい、簡潔な文章が収められ、少年の気持ちを魅きつけたとみられる。

鶴沢寛氏は、高等科二年までの自己の受けた綴方教授をふりかへつて、

「自然の観察、人事の洞察、描写の方法について一年からの先生も教へて呉れなかつた。私等は文範を時々授かり、漠然たる方向を勝手に認識した。」と述べている。「——一年からの先生も教へて呉れなかつた。」というところに、過渡期の綴方教授の未熟さがうかがわれよう。

鶴沢寛氏は、「綴方といふものは、文範の様に書くべきものだと考へてゐた。生々とした自然を生々とした瞳で見居たに關らず、それが最も芸術表現の根本であるにかゝらず、私達の綴方には不必要のものであつた。」と述べ、また、「私達の受けた綴方教育は字を並べる方法を教へられるのにあつた。」「美しく、小綺麗に、難解語句を並べれば、ほめられてゐたのだ。」とも述べられた。みずから受けてきた綴方教授に対するきびしい批判のことばとなつてゐる。

六

滑川道夫博士のまとめられた、「日本作文綴方教育史」2 大正篇(昭和53年11月20日、国土社刊)によれば、その第十五章「大正期綴り方教育の総括」の中に、「わたしの受けた作文教育」として、長谷川乙一(明治三五年八一九〇二〇)・藤田圭雄(明治三八年八一九〇五)・井上敏夫(明治四四年八一九二一)三氏の

綴方学習個体史とも見るべき記述が収録されている。

長谷川乙一氏は、明治四二年（一九〇九）小学校（愛知県西加茂郡三好第三小学校）に入学した。大正二年（一九一三）、小学校五年生の折の綴方をとり上げて記述がなされている。

次に、藤田圭雄氏は、明治四五年（一九一二）に小学校（東京府牛込北町愛日小学校）に入学した。みずからの小学校時代の綴方学習のことが述べられている。

また、井上敏夫氏は大正七年（一九一八）、小学校（静岡県小笠郡栗本村小学校）に入学した。小学校時代の綴方学習が回想され、「赤い鳥」との出会いにも言及されている。

鶴沢寛氏は、明治四五年（一九一二）四月、千葉県下の小学校に入学した。藤田圭雄氏と同じ年の入学であった。

長谷川乙一・藤田圭雄・井上敏夫三氏の当時（大正期）の綴方学習に関する記述は、それぞれ示唆に富むものとなっているが、三氏の回想の記述に比し、鶴沢寛氏の「私の生活と私の受けた綴方教育」と題する綴方学習個体史は、尋一から高二まで、各学年にわたって可能なかぎり克明に述べられている。大正初期・中期にわたって、各学年ごとに回想されているのも、大きい特色の一つとなっている。

鶴沢寛氏の記述された「私の生活と私の受けた綴方教育」は、大正初期・中期の初等教育における綴方学習個体史として、豊富な内容が盛り込まれ、当時の綴方学習の報告として、示唆深いものを蔵している。昭和二年（一九二七）の時点で、鶴沢寛氏が千葉師範学校を卒業して間もなく回想されていることもあって、学習資料なども具体的にとり上げられている。当時の綴方教授が当面していた、

過渡期の問題点が、一人の学習者の眼を通して、また学習体験をふまえて的確におさえられている。

資質に恵まれ、家庭環境に恵まれて、順調に育った鶴沢寛少年が、みずからの生活を題材として文章に表わしていくことができず、たえず満たされぬものを感じていたことも、読み手としての豊かな体験を生かしつつ、独自の表現活動をつづけていくようになる経緯も、その記述を通してうかがうことができる。（昭和59年6月15日稿）

（本学名誉教授・鳴門教育大学教授）